第 1 章
東大 YMCA 会館 50 年の歩み



章表紙デザイン：Theodorus J. Wijaya

東大 YMCA 会館（新舎）50 年の歩み

新会館建設までの歴史

東京帝国大学学生基督教青年会（注[1]）は 1888 年（明治 21 年）5 月 13 日西片町十番地木村熊二宅に創始者となる大西祝氏ら 9 名が参集した時に始まる。アメリカのミッションボードから派遣されたジョン・T・スウィフト氏の勧奨によるという。スウィフト氏は、この年米国 YMCA から派遣された教師であり、日本の学生 YMCA の創設に力と情熱を注いだ人物であった。

寄宿舎生活を通して青年会活動を深めるべく寄宿舎を兼ねた会館（木造総二階）が本郷台町三十番地（現本郷五丁目）に新設されたのは 10 年後の 1898 年（明治 31 年）9 月のこと、建築費用の大半はスウィフト氏が米国で集めてくれた募金であったという。時は明治中期、日清戦争（1894～1895 年）後、明治近代化が加速された頃である。



旧追分会館（落成当時配布されたパンフレットから）

この台町会館が手狭となったことから、1912 年（明治 45 年）に新会館敷地として文京区駒込追分町五十三番地、同五十四番地計約 285 坪が購入された。江戸時代は足軽屋敷であったという細長い敷地であり、当青年会の現在地（文京区向ヶ丘一丁目二十番地六号）周辺である。なお、台町会館の敷地は新会館建築のための原資の一部として売却されたため、在舎生は駒込千駄木町（現千駄木二丁目）に数棟を借用し仮会館とした。

新しい会館兼寄宿舎（旧追分会館という）が落成したのは 1916 年（大正 5 年）春、当青年会発足から 28 年目のこと、時世は第一次世界大戦下（1914～1918）であった。

旧追分会館は間口八間弱、奥行三十三間の細長い敷地に前面にレンガ造り五階建ての会館部その奥に木造の寄宿舎と講堂兼体育館が連なっていた。当時の青年会先輩諸氏の活躍は目覚ま

---

[1] （注）1973 年 1 月 28 日の理事会で当会の名称は「東京帝国大学学生基督教青年会」から「東京大学学生基督教青年会」に名称変更された。戦後 28 年にしてアップデートされたのは、珍聞ではあるが、略すれば東大 YMCA に違いはない。なお、2012 年 4 月からは「公益財団法人　東京大学学生キリスト教青年会」としてスタートし現在に至る。
ちなみに戦後の学制変更に伴い 1947 年（昭和 22 年）、東京帝国大学は東京大学へ改称され、1949 年（昭和 24 年）に旧制第一高等学校を併合して新制東京大学となり現在に至っている。

しいものがあり、翌年 1917 年（大正 6 年）夏この会館の地下室の 6 畳ばかりの部屋で青年会出身の若手医師達による大学青年会医院が開院し、無料での医療奉仕が始まった。この活動はその後大きく発展し社会福祉法人賛育会として結実した。同じく片山哲氏らによる日本初の法律相談所、藤田逸男氏らによる家庭購買組合（今でいう生活協同組合のことか）もここを原点とする。また、音楽会などの文化的行事も折々開催され大正デモクラシーの花開く時期を謳歌したようだ。

1923 年（大正 12 年）9 月 1 日に発生した関東大震災は山梨神奈川県境あたりを震源地とするマグニチュード 8 規模の大地震であったが、東京府下でも甚大な被害が生じた。本会旧追分会館も類に漏れず、建物は大きな被害を受けた。幸い舎生は無事であったが、食料問題もあり、舎は一時閉鎖したが、ほどなく応急修理で再開できたとのこと。

1926 年（大正 15 年）に根本的な改修を施し建物を一新し、5 月 13 日に新会館開館式があった。これを新追分会館と呼ぶことにするが、当青年会先輩で近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトのもと活躍していた建築士の遠藤新氏がデザインしたことから、外観内装家具に至るまでライト氏が設計した旧帝国ホテルを彷彿させる当時としてはモダンな建物であった。爾後 40 数年、太平洋戦争の空襲にも類焼を免れるなど昭和の激動の時期を耐え、戦後はキリスト教活動の拠点として機能し、また寄宿舎からは幾多の先輩諸氏を送り出してきた。



新追分会館（1926 年当時）

戦後になると会館建物の劣化が目立つようになり、屋根の剥離、軒先の大谷石の風化、雨漏、天井漆喰の落下、衛生設備の痛みなどは看過できない状態にあった。戦後 1950 年に大規模修理が施されたものの全体の老朽化は如何ともしがたく、1918 年完成の二舎と呼ばれる寄宿舎部分については倒壊寸前のため使用禁止になるなどもあり、1960 年代頃から抜本的な対策すなわち建て直しが必要とされ、その事前検討が始まっていた。

会館建て直しの機運が盛り上がったのは 1970 年代に入ってからである。当時喫緊の課題であったはずの再建の本格的検討が 1971 年まで持ち越されたのは 1968 年から始まった大学民主化の流れ、いわゆる大学紛争が大きく影響したものと推察される。1969 年（昭和 44 年）1 月の安田講堂事件に代表される一連の騒動はその年の入学試験が中止されるなど社会的に大きなインパクトを与えたが、当時の教職員学生に、また寄宿舎生ひとりひとりにも大きな影を投げかけた出来事であった。

新会館兼寄宿舎の建設

1971 年（昭和 46 年）6 月 17 日、本会理事会（堀豊彦理事長）にて会館の再建築をなすことが決定され、さっそく再建準備委員会が動き出している。会館建て直しのために発足した再建準備委員会は、先輩会員十七名、在舎生全員で組織され、翌 1972 年まで八回にわたる検討の結果、青年会の財力を踏まえ現所有地の活用を基本とした以下三案に整理された。

1　現所有地を売却した基金と募金をもとに代替地を求め会館を新築する
2　現所有地の一部を売却した基金と募金をもとに残地に会館を新築する
3　現所有地に高層建築を建てさせ、代わりに建物内に青年会のスペースを確保する

代替地について種々魅力的な提案が寄せられ、その得失に鋭意検討がなされた結果、1972 年 4 月、理事会は最終的に③案によることとし、各種提案のうち東海興業株式会社による等価交換方式が採用された。この交渉にあたって有利な条件で契約できたのは先輩会員特に再建委員長の植田武彦、副委員長の山崎幸一郎両氏の尽力によるとのことであった。

以後、再建委員会が発足し具体的なスケジュールや施策が精力的に議論され実行された。

青年会館内部の設計については、設計小委員会が組織され、デザイン実務は当青年会理事でもあった岩井要氏の真設計建設事務所に委任された。岩井氏と事務所は日本全国の教会やキリスト教系学校建築に経験が深く、まさに適任であった。

ここでは紙面の関係でお名前は載せられないが、多くの先輩諸氏が会館再建という一大事業にあたって、率先して取り組んでくれた賜物である。また、再建のための募金活動は（折しも大学紛争の影響で休講中であった）舎生達が先輩宅を訪問するなどねばり強く活動、最終的に会員 350 名、28 法人から総額 2660 万円の浄財が集まった。

会館再建の詳細な経緯については、岩井要氏の本青年会百年誌（1988 年 5 月発行）への寄稿、ならびに岩見宣治氏の本誌エッセイに詳しい。

過去 47 年間にわたり当青年会の活動の場であった、新追分会館は 1973 年（昭和 48 年）5 月に取り壊され、北側の追分旅館までの数十戸の住宅地を含め再開発され、14 階建てのマンション、ファミール本郷へと変貌を遂げた。

新会館は 1975 年（昭和 50 年）3 月 15 日に完成、4 月 26 日には 120 名の出席者を集めて竣工式を行った。

新会館は上部マンションとの



新会館兼寄宿舎（1975 年建設：写真は 1996 年地下鉄南北線開通で東大前駅ができた際のもの）

関係で種々の設計上の制約をうけたものの、表通りから玄関を通して階段を上がり横に礼拝堂、靴を履き替えて事務室や OB 談話室、食堂とつながる 2 階部分、3 階、4 階に 25 室の各寄宿室、図書室、客間、卓球室などが設けられた。旧舎で使用されていた家具、机や椅子などの調度品については補修が施され新舎でも活用された。また、当青年会の貴重な収入源として 1 階部分外側の貸事務室とマンションの一室が確保されたが、後日後者については売却された。

新会館が建てられた 1970 年代は戦後の高度経済成長期が石油ショック等で終焉を迎え安定成長に入った時期であった。カラーテレビ、クーラー、自動車といった新三種の神器が普及し始め、ヒッピーや学生運動で流行ったジーンズが市民権を得た。1970 年（昭和 45 年）に前回の大阪万博が、1972 年（昭和 47 年）に札幌冬季オリンピックや沖縄の返還があった。世界に目を転じれば、ウォーターゲート事件（1974 年）があり、長く続いたベトナム戦争は 1975 年のサイゴン陥落をもって終結している。

新会館完成後、建設期間中舎外での生活を強いられていた旧舎メンバーと新しく入舎したメンバーとの共同生活が始まり、夕禱等の良き伝統は新舎に引き継がれた。



100 周年記念祝会の様子（1988.5.14）

50 年の歩み

2025 年春、新会館が再建されて 50 年が経った。Anno Domini 2025、主イエス・キリストが誕生されてからの歴史を振り返ればこの 50 年はあまりにも短い。

舎生たちは概ね 3〜4 年の間隔で入舎し巣立っていく。彼らが寄宿舎で何を考え、何を語

り、どんな生活をして来たかを概説することは難しい。ましてキリスト者として、あるいはキリスト者たらんとして、何を目指し、何を悩み、何を苦しんだかは当事者でも語りつくせないだろう。ここでは、新会館ができて 50 年、当青年会の動き、寄宿舎の中外であった折々の出来事などを紹介し、その当時の様子を振り返ってみたい。

百周年記念行事

1888 年創立以来百周年を迎え、1988 年 5 月 14 日に創立 100 周年記念礼拝と式典が開催された。参加者は 100 余名であった。

また、100 年記念誌が発行され当時理事長であった成瀬治氏は輝かしい歴史を語るとともに大先輩である森有正氏や木下順二氏が旧舎に住んでおられた思い出、青年会のために勤励されていた諸氏への感謝を述べられている。記念誌では、当時舎生でその後長く学生主事を務めた三沢和彦氏が百年のあゆみを滔々と語るとともに、我々ひとりひとりの真剣な前向きの姿勢こそが次の百年の礎となるにちがいないと記している。また、青年会先輩諸氏や当時舎生からの熱いあかしも掲載されている。1988 年、時代は物質的には豊かになる一方、過労死に代表される心の問題が表面化してくる世相であり、激動の昭和が終焉を迎える前の年であった。

東日本大震災

2011 年 3 月 11 日宮城県沖を震源としたマグニチュード 9、最大震度 7、未曾有の大地震と津波が東日本太平洋側を襲い、東北地方を中心に甚大な被害が発生した。当青年会会館も建物の一部にひび割れが散見されたが、幸い構造的な問題はなく 227 万円の費用で補修ができた。


新生釜石教会の被災状況

当青年会 OB の柳谷雄介氏が牧師をしている岩手県釜石市新生釜石教会でも一階の天井付近まで津波で浸水したという。小学生、中学生達が日頃の訓練の成果でうまく避難できたため釜石の奇跡と呼ばれているが釜石市全体では 1211 名の死者行方不明が出たという。この教会の復旧や近所への支援物資を配ることなど震災ボランティアで参加した当時舎生の中島彰氏は当青年会会報第 136 号にその活動を報告し被災地への祈りをささげている。

当青年会では有志からの募金をつのり、会堂再建と被災者支援事業のために 200 万円を教会に寄付した。柳谷牧師は会報への寄稿で「被災地でキリストの声を聞く」と題し会員 26 人の小さい教会も牧師教会員の家も壊滅的な被害を受けたこと、教会の駐車場に設置した赤テント

で被災地に必要な休む場所を提供できたこと、各方面からの支援が役立ったこと、その場所から助け合う機会が与えられ地域にますます認知されることができたという経験をヨハネ福音書四章サマリアの女性のたとえを引用して熱く語っている。また、2013 年秋季公開講演会では、柳谷牧師を招き、「世界中が祈った日」として講演していただいた。（会報 136、139、140 号参照）新生釜石教会では会堂内のピアノも浸水転覆したが 5 年後に修理ができ奇跡のピアノとして復活し今でも音色を奏でているという。


3 月 20 日（日）被災地で守られた礼拝災地

公益財団法人化

当青年会は長く特殊財団法人として活動してきたが、法令の改定にともない、2013 年 1 月までに公益財団法人か一般財団法人に移行しなければならなくなった。検討の結果、社会からその公益性が広く認められること、寄付していただいた方々にとって所得控除の対象になること、青年会の預金利息が非課税になり法人税や固定資産税などの減免が認められて財務的にも有利であることなどから公益財団法人の認定を目指すこととなった。当時の長島章常務理事のもと諸条件を満たすべく煩雑な事務作業をこなし、2012 年 3 月には公益認定書を受領することができ、2012 年 4 月より公益財団法人としてスタートし、現在に至っている。なお、この認定を維持していくためには事務手続きなどの負担や種々の制約があることを留意したい。

女性舎生の受け入れ

寄宿舎に女性の入舎を受け入れることは長年の課題であった。過去の資料をひもとくと 1960 年に当時の堀豊彦理事長が、女子学生の入寮希望を断った経緯から、男女共学化を踏まえ、いずれは女子の入寮も考えないといけないとの発言があった。長年の懸案について理事会の考え方の整理がついたのは 2003 年のことであった。寄宿舎募集要領を見直す中で、キリスト者またはキリスト者たらんとする男子東大生を基本とするが、特に希望のある場合は女子学生の入舎も認めるべきと変更された。また外国人留学生の受け入れについても全体の 3 分の 1 程度まで認めることが確認された。この方針にもとづき、寄宿舎では女子学生受け入れのための施設が整えられていく。ただし、舎生側では反対論も多く、例えば 2005 年の舎内総会では女性入寮を認めないという意見が大勢を占めている。このため、寄宿舎募集案内に現在のところ女子学生は受け付けていない旨、付記するという苦しい対応となった。

最終的に舎生側の理解が得られ女子舎生の受け入れ方針が確認されたのは 2014 年 2 月のこと、東大生の 3 割程度が女子学生であること、当時の舎生が少なくなった状況などの事情が背中を押した形となり、2014 年 4 月以降女性を受け入れることとなった。

2014 年 4 月 13 日にリン・リリアナさんが最初の女子入舎生となった。以後、女子学生の入舎は増え、2026 年現在、5 名が在舎している。

新型コロナウイルス （COVID-19）

2019 年に中国で発生した新型コロナウイルス感染症は 2020 年になって日本でも感染が始まり 2023 年まで世界的に蔓延し、多くの感染者、死亡者と経済的な打撃をもたらした。また感染防止の動きの中から新しい生活様式が生まれた。当青年会でも新舎生の募集に苦しんだ時代でもあったが、感染防止のため対面での会議を控えビデオ会議を開くなどの対応を行い、またオンライン併用での講演会や祝会が守られた。2020 年発行の会報 154 号では、感染症とメンタルヘルス、コロナ禍をいかに生きるかなどの特集が組まれている。世界中がコロナ禍にあってどう生きるかを考え、なんとか守りぬいた時代であった。

キリスト者あるいはキリスト者たらんとして、そして寄宿舎生活について

当青年会はキリスト教を学ぶ場としてぜいたくな場所である。聖書研究会や合同祈祷会、公開講演会などその機会は多い。早天祈祷会（早祷、1998 年 3 月までは夕祷であった）での話も刺激的である。ぜひ、この学びを絶やさず進めて行って欲しい。

当青年会の入舎選考は大学入試より難しいという逸話があった。現在はどの程度「難しい」のだろうか。選ばれる者も緊張しただろうが、選ぶ舎生側からすると全会一致の結論がでるまで夜まで延々と議論を繰り返す場面があった。大学生、院生の中から舎生として適当な人財を選ぶのだから入試より難しいはずである。特にキリスト者たらんとする者については、要らぬ議論が沸騰した。

一概にキリスト者と言っても、舎内にはプロテスタントもいればカトリックもいる、諸教派に所属する人もいる。こういった混沌とした舎内では、夕祷や早祷だけでなく日常的な会話でも宗教戦争が起こりかねない・・・？

冗談はさておき、各自のキリスト教に対する思いや基盤が異なることは得難い化学反応を起こすはずだ。さらに、勉強する学問も異なること、留学生を交えた国際的な雰囲気は、良い意味での多様性の環境を作っている。最近の言葉であろうが、個人のアイデンティを尊重できる共生社会としてサラダボウルという概念が提唱されているという。当青年会では、この好ましい形での多様性を今後も育んでいきたいものである。

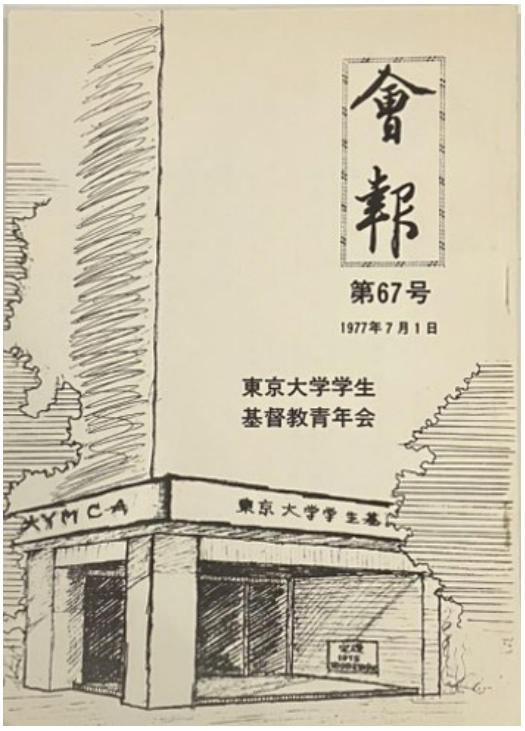
在舎生の諸活動について

在舎生は総務部、聖研部、企画部、文共部に分かれて、それぞれの役割を果たしており、そ

れぞれの部は各学生理事がまとめている。青年会会報末尾あたりに事業部報告があるが、注目して読まれていることをどうか覚えていて欲しい。在舎生が何を考え、何を働いたか、活動は活発か、在舎生の数は不足していないか、先輩に何か支援して欲しいことはないか、などなど興味はつきない。

その会報の発行は文共部の重要な仕事である。日常の勉学の合間に年二回発行するのは大変な作業かと思うが、どうか気楽に本音を書いて欲しい。今回、新会館建設後の 1977 年に紙面が刷新された会報第 67 号（右図）から最新号の第 164 号まで目を通す機会があったが、人生の指針となりうる記事や折々のイベント、微笑ましい内容まで、その時々の時代を彷彿とさせてくれる。会報のバックナンバーは東大 YMCA を訪ねて OB 談話室に行けば、読むことはできるわけだが、せっかくの貴重な資料、デジタル・アーカイブできないものかと思った次第である。

次に聖研部では、日々の早天祈祷会だけでなく、聖書研究会や合同祈祷会などを担当し、舎生の信仰活動を育む基となっている。



新舎後 1977 年の会報（表紙は当時舎生の團紀彦氏による）

企画部では、春、秋の公開講演会や卒舎生を囲んだ座談会などを運営するとともに、クリスマス祝会や歓迎会、予餞会など、フットワークは軽く、その働きには頭が下がる思いである。

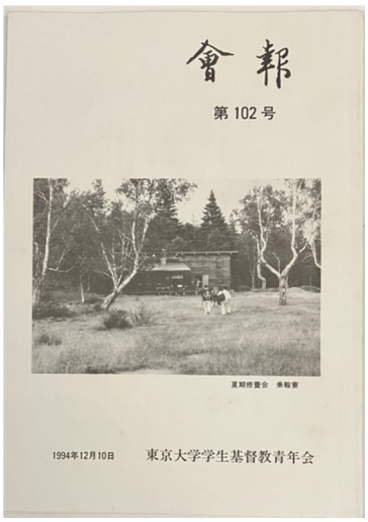
総務部では、ブログの運営や学生 YMCA やその他外部団体との交流など渉外活動に忙しい。どういうわけか修養会も担当しているのが興味深いところである。

普段勉学等に忙しい在舎生だが、毎年予定を組んで寄宿舎を離れ旅行先で修養会を開いている。修養会も、てんこ盛りのスケジュールだと、ゆっくり旅行気分を味わえないかもしれない。半分レクレーション、半分勉強会かもしれないし、夜になればアルコールも欲しくなる。限られた時間でまとまった学びができるのは難しいかもしれないが、楽しい思い出になることは間違いない。

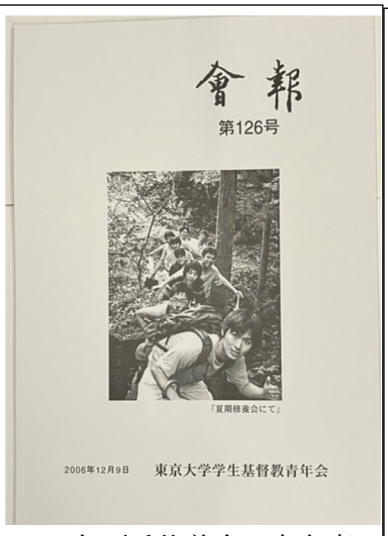
1984 年夏の修養会は、大学が夏休みに入ってすぐ 7 月に八王子の大学セミナーハウスにて二泊三日で行われた。16 名参加できたのは、都心からの交通の便の良さも関係したのであろう。勉強の題材はヨブ記であった。4 月から聖書研究会で読み込んできたこともあり、聖書の理解から個人の信仰生活まで広きにわたって熱心な討論が行われたとのこと。当時の在舎生の

真摯な態度と聖研を指導され修養会にも参加された月本昭男先輩（現理事長）のコーチングが良い結果を生んだようだ。会報第 82 号では、8 ページにわたってその修養会の特集が組まれている。うらやましい成果である。

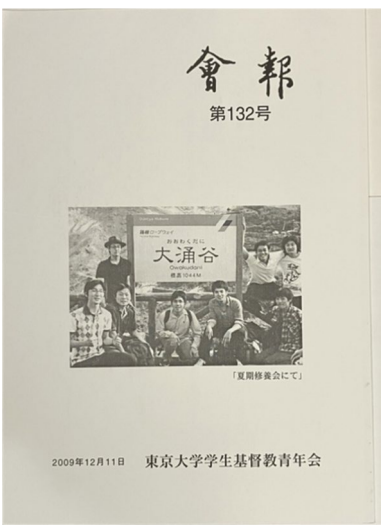
会報の表紙に時々修養会のスナップが掲載されたものがあった。下に 3 つほど紹介させていただきたい。楽しそうな絵である。参加されたメンバーにとって一生の思い出となるのではないだろうか。



1994 年夏季修養会@乗鞍寮



2006 年夏季修養会@奥多摩



2009 年夏季修養会@箱根

横のつながり、縦のつながり

他大学 YMCA/YWCA などとの交流や賛育会等外部団体とのつながりは定期的に行われている。学業に忙しい在舎生にとって負担は大きいが、今後も継続して欲しいものである。

寄宿舎で一緒に過ごして来た仲間の絆はかたい。同じ頃に寄宿舎にいた仲間が定期的に集まって皆の近況を確かめるとともに在舎時代を懐かしむ伝統である。集まるにはそれなりの会名が必要ということで、ユニークな名前をつけて気勢をあげる。朴羅会、雅茶会、エントツ会、シニア OB 会、森と木の会、昭和 26～30 年卒業生の会、追分会、同期会、さりげなく集う YM の会、若手会、発散会、他にもあるかもしれない。また関西地区では地域的に集まる関西 OB 会が定期的に開催された。残念ながら、これら世代別の OB 会も、コロナ禍やメンバーの高齢化等でその勢いもしぼんでしまったように危惧されたが、最近またポツポツ再開されたようで何よりである。

OB 座談会、卒舎生座談会などを通して在舎生が先輩の仕事ぶりや活躍ぶりなどを学ぶ機会もある。先輩が寄宿舎を訪問しあるいは海外からはオンラインを通してその経験を語り、若い舎生と意見交換する交わりが定期的に開かれている。在舎生にとって卒業後の進路を考える上でも得難い情報であろう。こうした縦のつながりも絶えないで欲しい。

当寄宿舎で働いていただいた方々

当青年会の専務理事あるいは常務理事は数ある会員の中からこれはという方を選び担当していただいてきた。各自個人的な負担をいとわずご精励いただいた。ここでは畏敬の念をこめて新寄宿舎になってからの各氏を振り返りたい。

馬場進氏は 1975 年 4 月に当青年会が晴れて新舎に入った際に専務理事として着任され、明治、大正以来の伝統を新しい世代に伝え、新舎の基を築かれた。その後も 19 年間の長きにわたり勤められ、ご苦労いただいた。



馬場専務理事
（1988 年当時：百周年記念式典にて）

徳久俊彦氏は常務理事として 1996 年から 6 年間務められたが、この期間は舎内の設備補修が三度も発生しご苦労があったと聞く。2002 年に徳久氏が賛育会理事長にならられたこともあり当青年会の常務理事を辞任された（その後当青年会理事長として戻られた時代に再び常務理事を兼務された）。

野口吉三郎氏は 2002 年から約 4 年半の間務められたが、当時女性舎生受け入れの是非をめぐり舎内で喧々諤々の議論がなされた時期であった。学生理事として激論を闘わせた村上善道氏は、2012 年に野口氏が帰天された際に追悼文を寄せ、「愛と強い責任感をもって舎監としての職責を全うされた」と会報第 136 号で記している。

長島章氏は 2006 年から 2015 年まで常務理事として務めていただき、公益法人化実現に尽力されたことは先述した通りである。

2015 年に東京女子大で事務局長をやっておられた桃井明男氏を当青年会の事務局長として迎え、事務全般を見ていただくことができた為、その後しばらく原田明夫理事長や徳久俊彦理事長が常務理事を兼務する時期が続いたが、都の立ち入り検査で公益法人として兼務は認められないとの厳しい指摘があり、対応に走る一幕もあった。ようやく 2020 年 5 月から篠原正雄氏が常務理事につかれ現在まで働いていただいている。また、2023 年 9 月から岩見宣治氏が管理担当理事として選任され、会館将来構想の検討やリノベーションの為の働きを進めていただいている。さらに、2024 年 9 月からは徳永友花氏が舎生担当理事として舎生の相談にのる働きを進めていただいている。

各氏が任期中に果たされた、あるいは、まさに果たされている大いなる貢献と数々の労苦に深く感謝したい。

代々の学生主事の方にも、日常生活を通して舎生を指導していただき、大変活躍していただ


加藤せつさん
（1977 年クリスマス祝会にて）

いた。各自学究生活に没頭しなければいけない境遇でありながら、若い後輩舎生の困りごとなど相談にのってもらった。その労をねぎらいたい。

また、事務方や炊事の仕事等で多くの方々にご尽力いただいたので大いに感謝したい。

特に加藤せつさんにおかれては、馬場進専務理事が経営された会社で働いておられたところ新舎再建時に馬場氏に請われて一緒に当青年会に来ていただき、2006 年 7 月まで実に 31 年と 2 か月の長きにわたり事務の仕事を一手に引き受けて頂いた。同時に舎生の良き相談相手として、いわば、母親代わりであった。残念ながら晩年は健康を害され 2012 年に帰天された。翌年 1 月には加藤さんをしのぶ会が当青年会会館にて 54 名出席で開かれた。当青年会 100 年誌の中で舎生との交わりについて加藤さんは次のように書かれている。

『子供のいない私にとり、学生に心配させられ、また喜びを与えられる日々が、生き甲斐となりました。友人に「あなたは幸せね。　東大生ばかり優秀な子供がたくさんいて」と言われます。』

また、末尾に以下の言葉を、私の好きな聖句としてあげておられた。

『愛は全てを完全に結ぶ帯である』（コロサイ 3・14）

寄宿舎内の技術革新

1975 年新舎になった頃は、電話が一台あった程度で IT としては何もない、ある意味潔い時代であった。数年後にコピー機が入った時は舎生一同驚いたものである。当時、パソコンもなかったし携帯電話もなかった。

当青年会の会報にしても、新舎設立当時は折り畳み 4 ページの簡素なものであったが、当時舎生の山口栄一氏が加藤せつさんと相談し冊子形式に変更したのが前述した第 67 号であった。1977 年当時、会報を作るには手書きの原稿を東大紛争後廃墟と化していた安田講堂地下にある印刷所に持ち込み、和文タイプで印刷製本してもらったとのことである。

大学でもコンピューターを利用したい時は学内の大型計算機センターに行かねばならない時代、日本で最初のパソコンが発売されたのは 1978 年だから無理もない。ワープロが便利な時代が来て、その後アップルという会社がマッキントッシュを発売したのが 1984 年、マイクロソフトという会社がウィンドウズというソフトを発売したのが 1990 年である。

寄宿舎にインターネット回線が入ったのは、2000 年前後かと思われる。ちなみに東大 YMCA 寄宿舎のホームページ(https://todaiymca.blogspot.com)や SNS（現在は X: @Todai_YMCA）は、2012－13 年頃に舎生たち（特に税所真也兄・坂本敬史兄・千葉岳洋

兄・谷田巖兄・木原盾兄など）の働きで現在の形で運用が本格化した。また、公益財団法人としての東大 YMCA の Web サイト（https://todaiymca.or.jp）は 2016 年頃に創設された。こちらは、当時舎生でマレーシアからの留学生のヘロル・ガイビン氏がドメイン開設からホームページ作成まで、献身的に寮に尽くして下さった。

会館施設設備の維持改善

会館の施設設備については使用につれ老朽化が目立つものも出てくるし、時代のニーズに合わないものもでてくる。1992 年に給水管交換工事、1993 年には外壁の大規模補修を実施、建設後 17 年余り最初の大きな出費、計 3700 万円である。続いて 1995 年に内装、照明、冷凍機交換等の大規模な内部補修（2350 万円）が行われ、その年のクリスマスでは見違えるほどきれいになった会館で祝会が行われたと特記されている。1999 年には落雷停電を期に高圧線の張り替えと礼拝堂の照明工事、風呂ボイラーと浴室の改修（費用不詳）が行われた。2001 年には暖房灯油配管の全面更新（費用不詳）を行った。2003、4 年には 2 階の旧賄い人室を女性用浴室に改修、女性用トイレを新設、空調（エアコン）の各室設置、衛生設備の更新や外壁補修など（約 3000 万円）が行われた。これら工事の都度、補修費用捻出のため募金活動が行われ、募金浄財や内部留保で賄われている。

なお、建物の老朽化と関係するかもしれないが、2003 年 3 月には、当寄宿舎上のファミール本郷 7 階で水道管のつなぎ目が外れ、漏水事故になった。このため、4 階階段上の天井から大量の水が流れ落ち、当寄宿舎内が「洪水」に見舞われるという大事件となった。在舎生は総出で真夜中 2 時間ほど排水作業を行ったという。おかげで舎生の一致団結が図られたという成功談はともかく、舎内の内装被害は大規模にわたり、原状修復するまでに約半年、費用は約 1500 万円掛かった。修復費用すべてはファミール本郷側で負担してくれたのは不幸中の幸いであった。会報第 119 号では、当時学生主事だった中村義哉氏がこの洪水事件の顛末を誇らかに報告している。

今後の再建に関する検討とリフォーム事業

50 周年の節目を迎える前に 2023 年頃より会館の将来構想について検討が行われている。会館建物は、ファミール本郷との区分所有でありファミール本郷との協調が必要である。ただし、現下の法律条例のもとでは現在の階数ですら作り直すことはできないという制約もある。再建にはなかなか困難な状況にあるわけだが、当青年会としては将来の会館・寄宿舎再建に資するため募金活動を始めることとした。この専用募金は他の運営資金に流用しないことを原則とし、ひろく募金活動が始まったところである。一方、現有設備等の老朽化も目立つことから、内装、トイレ浴室などの衛生設備やセキュリティ対策について改善を図ることとし、先輩の中から山口栄一氏を委員長とし、團紀彦氏にデザインや施工方法を検討していただくプロジェクトが進行中である。

2025 年新会館 50 周年記念行事

会館竣工 50 周年を記念して 2025 年 11 月 23 日に記念式典（礼拝ならびに講演会）と祝賀会が開催された。礼拝では当青年会 OB である上田光正牧師に「キリストはわたしたちの平和」と題して説教を行っていただき、その後講演会では当青年会 OB の團紀彦氏に「大地と建築と祈りの場」と題して古代の教会建築の紹介と團氏の建築デザインを踏まえながら講演を行っていただいた。

また、記念事業の一つとして本誌の刊行に至った。本誌 2 章、3 章では卒舎生や現役舎生、関係する皆さんから多くのエッセイが寄せられた。これらは、50 年にわたる折々の懐かしいスナップショットであり、また当青年会の将来へとつなぐ羅針盤ともなりうる。

新しい 50 年へ

50 年の時の流れの中で、戦争の時代と言われた 20 世紀が終わって 21 世紀となり、すでにその 4 半紀が経過した。日本では激動の昭和が去り、31 年で平成が終わり、令和の時代に至る。しかしながら、時代を経ても地上世界では戦いが絶えず、社会的な不正や制度の不備がはびこるだけでなく、地球環境の問題も枚挙にいとまがない。技術が進み、AI、人工知能の時代が到来したというが所詮あさはかな人間の知恵レベルのままで、神の代わりはできまい。

我が青年会の「新」会館・寄宿舎での諸活動や日々の生活の積み重ねは、50 年にわたる新たな地層を形成した。また寄宿舎を巣立った先輩諸氏の社会での活躍は輝かしいものがある。我が青年会は、それら業績に恥じない新たな歩みを踏みしめつつ、キリスト者・キリスト者たらんとする者として御国の到来を待ち望みたい。

（半田 武比古）